

B-4

南琉球八重山語石垣島大浜方言における焦点標識とモダリティ*

占部 由子

(九州大学大学院/ 日本学術振興会特別研究員)

y-urabe@kyudai.jp

【要旨】

本発表は南琉球八重山語石垣島大浜方言 (以下、大浜方言) における焦点標識 (=du) の使用を記述し、これを元に、Shimoji (2018) が提示する焦点階層に新たな階層を加えることを提案する。これまでの琉球諸語研究では、命令文において焦点標識が出現できないことが指摘されてきた。しかし、発表者の調査により、大浜方言では主語の対比焦点のときに、命令文でも焦点標識が出現可能であることが明らかになった。Shimoji (2018) の階層は、大浜方言における焦点標識の出現可能な範囲については説明できるが、大浜方言以外の方言において命令文で焦点標識が出現不可であることは説明できない。これに対し本発表では、大浜方言と周辺方言における焦点標識の使用を比較し、焦点標識が直説法、意志、命令の順で出現しにくくなるというモダリティの階層を取り入れることで、通方言的な説明が可能になることを示す。

1 南琉球八重山語

南琉球八重山語は、与那国島を除く八重山列島の有人島で話されている言語である。八重山語が話されている地域の地図と、ローレンス (2000) に基づく八重山語内の系統関係を示す。

国土地理院地図 千1422番 第143号



図 1. 八重山語が話されている地域

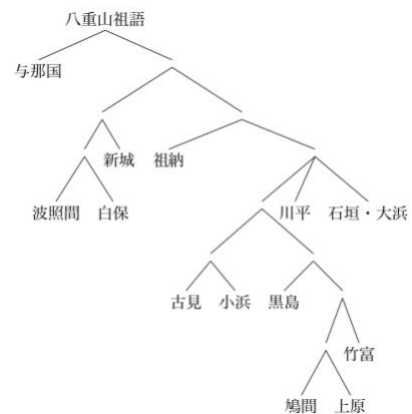


図 2. 八重山語の系統関係

* 本発表は、JSPS 科研費 16K16843 (研究代表者: 下地理則)、 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」 (プロジェクトリーダー: 木部暢子)、 特別研究員奨励費 18J21798 の助成を受けている。本発表で提示するデータのうち、大浜方言と真栄里方言のものは発表者の調査で収集し、竹富島方言のものは中川奈津子氏から提供していただいた。データや言語事実を共有していただいた中川奈津子氏と下地理則先生、調査において協力して下さる石垣島・西表島の話者のみなさま、特に大浜方言を教えていただいた廣田ご夫妻と真栄里方言を教えていただいた細工忠郎氏に、深く感謝申し上げたい。なお、発表における誤謬は全て発表者の責任である。

2 これまでの研究：情報構造と焦点標識

琉球諸語では日本語古典語の係助詞ゾに由来する焦点標識 *=du* が現存し、方言ごとに出現可能な範囲の差異が存在することが指摘されてきた。この差異を情報構造の観点から、通方言的に説明した先行研究として、Shimoji (2018) を取り上げる。Shimoji (2018) は方言間に見られる *=du* の使用の差異について、情報構造の観点から、焦点範囲と焦点タイプという 2 つの階層を提示し、これら 2 つの制限の差異として説明している。

(1) Focus-marking hierarchies in Ryukyuan (Note: WHA: an answer to a WH question)

- a. Focus Domain Hierarchy: Argument > Predicate
- b. Focus Type Hierarchy: Contrastive Focus > WHA Focus > WHQ Focus

[Shimoji 2018: 87]

これらの階層は、左に行くほど焦点標識が出現しやすいことを表している。(1b) の階層を例にすると、対比焦点 (Contrastive Focus) の場合に最も焦点標識が出現しやすく、WH 応答焦点 (WHA Focus)、WH 焦点 (WHQ Focus) という順で焦点標識が出現しにくくなる。さらに、階層のある段階で焦点標識が出現するならば、それより左側でも出現するという予測も表している。

(1a) の階層は、Shimoji (2018) の初期研究である下地 (2017) で、Argument をさらに主語と目的語に分け、主語 > 目的語 > 述語 となっていた。Shimoji (2018) の調査の段階でも主語と目的語を分けているが、最終的に (1a) の階層を採用している。その理由として、ほとんどの方言において主語と目的語は焦点標示の受けやすさが変わらないこと、北琉球奄美語徳之島伊仙町方言において目的語が主語よりも焦点標示されやすいデータが得られたことの 2 点を挙げている。

多地点調査の結果として、諸方言の間で、焦点タイプによる焦点標識の出現可能範囲の差が見られることを明らかにし、琉球諸語の方言を (2) の 3 つのパターンに分類している。

- ### (2)
- a. CF-sensitive pattern: 対比焦点の場合のみ焦点標識が使用可能
 - b. EF-sensitive pattern: 対比焦点と WHA 焦点の場合に焦点標識が使用可能
 - c. Non-restrictive pattern: いずれの焦点タイプにおいても焦点標識が使用可能

本発表で扱う南琉球語は、与那国語を除いて全て Non-restrictive pattern に分類されている。Non-restrictive pattern の例として、大浜方言の焦点標識の分布をまとめると表 1 のようになる。大浜方言の焦点標識は *=du* であり、これがどの焦点タイプにおいても出現している。

表 1. 大浜方言の焦点標識の分布

	Argument		Predicate
	主語	目的語	述語
対比	<i>taraa=du cibi=ju baruda.</i> 「(私はじゃなくて) 太郎がツボを割った。」	<i>pimizja=du cikanaeru.</i> 「(豚はじゃなくて) ヤギを飼っている。」	<i>simi=du siida.</i> 「(髪の毛を切るのではなく) 染めた。」
WHA	<i>ziraa=du taraa=ju nakasida.</i> 「次郎が太郎を泣かせた。」	<i>banaa=ja baaki=du cukuru.</i> 「私はかごを作る。」	<i>baa=ja zaru=du cukuru.</i> 「私はざるを作る。」
WHQ	<i>taa=du tara=ju nakasida.</i> 「誰が太郎を泣かせた？」	<i>waa=ja noo=du cukuru.</i> 「あなたは何を作る？」	<i>waa=ja noo=du siiru.</i> 「あなたは何をしている？」

Shimoji は論文中で琉球諸語の焦点標識に関する基本的な事項として、命令文では出現できないことを挙げている。しかし、発表者の調査により、大浜方言では命令文において焦点標識が出現可能なことが分かった。次節では、大浜方言の命令文における焦点標識の出現パターンを示し、Shimoji (2018) で説明できる事実とできない事実について述べる。

3 大浜方言の命令文における焦点標識の使用

以下に見るように、*=du* は主語の対比焦点の場合、命令文でも出現しうる。目的語焦点や述語焦点の場合は、焦点標識を使えない。

- (3) a. *taraa ar-anu. waa{=du/*=nu} jasai=ju kis-jaa.*
太郎 ある-NEG 2.SG={FOC/=NOM} 野菜=ACC 切る-IMP
「太郎じゃない。お前が野菜を切れ。」
- b. *izi=ja ar-anu. waa=ja jasai{=ju/*=du} kis-jaa.*
魚=TOP ある-NEG 2.SG=TOP 野菜={ACC/=FOC} 切る-IMP
「魚じゃない。お前は野菜を切れ。」
- c. *aaruso ar-anu. waa=ja jasai{=ju/*=du} kis-jaa.*
洗う ある-NEG 2.SG=TOP 野菜={ACC/=FOC} 切る-IMP
「洗うじゃない。お前は野菜を切れ。」

主語が焦点範囲にあっても、疑問文への回答 (Shimoji 2018 の WHA) では *=du* が出現しない¹。

- (4) 「誰が人参を切るの？」に対する回答
waa{=ja/=du} kindaikuni=ju kis-jaa.*
2.SG={TOP/=FOC} 人参=ACC 切る-IMP
「お前は人参を切れ。」

¹ (4) は主語が WH 応答の焦点範囲に入る例として調査したが、主語に主題標識 (*=ja*) がついていることから、意図している回答ではない可能性がある。現時点では他のデータがないため使用しているが、再度確認する必要がある。

(3) と (4) のデータは、Shimoji (2018) の階層で説明できる点と、説明できない点がある。

説明できる点は、大浜方言では命令文においても、焦点範囲と焦点タイプの 2 つが、焦点標識の使用に関わっていることである。(1a) と (1b) の階層の組み合わせから主語の対比焦点は最も焦点標識が出現しやすいことが予測されており、(3) と (4) のデータはそれに従っている。

説明できない点は、以下の 2 点である。第一に、(1a) の階層では、Argument の中でも主語が目的語よりも焦点標示を受けやすいことを説明できない。大浜方言では命令文において、(3a) のように主語が焦点範囲にある場合と (3b) のように目的語が焦点範囲にある場合で焦点標識の出現可否が異なっている。この点については、今後の課題で言及する。

第二に、Shimoji (2018) が提示する 2 つの焦点階層だけでは、なぜ大浜方言で命令文において焦点標識が出現可能で、他の方言で不可であるかが説明できない。次節以降では、説明できない点のうち 2 点目に注目していく。大浜方言と周辺方言における焦点標識の使用の差異について述べ、この差異を説明するために、Shimoji (2018) の焦点階層に対しモダリティに関する新たな階層を提案する。

4 新たな階層の導入

平叙・疑問・命令などの文タイプ (あるいはモダリティ; 以下ではモダリティで統一) によって焦点標識の出現が制限されることは、先行研究でも指摘されてきた。かりまた (2011) は、焦点標識とモダリティ・述語の形式の関連について、通方言的に調査している。

かりまた (2011) のデータを、発表者がモダリティと焦点標識の出現可否に着目してまとめたものが表 2 である。なお、方言によっては =du 以外の焦点標識が用いられるため、表 2 にはそれらも含めて記載している。

表 2. 各方言における焦点標識とモダリティ (括弧内は発表者の用語)

		沖縄語 那覇方言	沖縄語 今帰仁方言	宮古語 平良方言	八重山語 石垣方言
ものがたり文 (直説法)	いいきり文 (非過去)	=du	=du	=du	=du
	おしはかり文 (推測)	=du	=du/ =kuse:	=du	=du
たずねる文 (疑問法)	肯否質問文	=du	=du	=du/ =nu	=du
	疑問詞質問文			=ga	=du
はたらきかける文 (希求法)	さそいかけ文 (勧誘)				
	命令文				

かりまた (2011) は明言していないが、表 2 から焦点標識の出現についてモダリティによる序列が見える。すなわち、非直説法 (疑問法、希求法) で焦点標識が使えるなら、直説法でも使えるという序列である。

次節で詳しく述べるが、様々な非直説法のうち、特に意志と命令に着目すると、焦点標識の出現しやすさについて明確な一般化が可能になる。これを (5) に示す。

(5) モダリティの階層: 直説法 > 意志 > 命令

表 3. モダリティの階層に基づく焦点標識の出現予測 (F: 焦点標識が出現可能)

	A	B	B'	C	D	E	F	G
	例: 大浜方言	例: 真栄里方言	例: 竹富島方言					
直説法	F	F	F	F			F	
意志	F	F	(F)		F			F
命令	F					F	F	F

表 3 に示すように、直説法・意志・命令に関して焦点標示が可能かという点から考えると、論理的には表 3 の A から G のパターンがありうるが、現時点で実際に見つかっているのは階層に従う A、B、B' の 3 つのみである。C は、発表者の調査では確認できていないが、階層からその存在が予測されるものである。D - G に関しては、(5) の階層に反するパターンであり、存在しないことが予測され、実際見つかっていない。

以下では、特に八重山語に着目し、A パターンの例として大浜方言を、B パターンの例として石垣島真栄里方言と竹富島方言を見ていく。なお、これら 3 つの方言は全て Non-restrictive pattern の方言であり、直説法で焦点標識の出現が可能であるため、直説法の例は割愛する。焦点タイプに関しては、対比焦点に統一して比較する。

5 モダリティの階層から見た八重山語の焦点標示のパターン

A パターンの大浜方言では、命令文においても焦点標識が出現可能である。意志を表す場合には非過去接辞を用いる²。

- (6) a. *taraa=ja ar-anu. baa=du tamunu=ju bar-u.*
 太郎=TOP ある-NEG 1.SG=FOC 薪=ACC 割る-NPST
 「太郎はじゃない。私が薪を割る。」
- b. *gusi=ja ar-anu. cjaa=du num-u.*
 お酒=TOP ある-NEG お茶=FOC 飲む-NPST
 「お酒はじゃない。お茶を飲む。」

B パターンの真栄里方言は、かりまた (2011) や Shimoji (2018) が指摘するように、命令文において焦点標識が出現できない。

- (7) *taraa=ja ar-an-kunee waa(*=du) tamunoo bar-i.*
 太郎=TOP ある-NEG-? 2.SG(=FOC) 薪.ACC 割る-IMP
 「太郎じゃなくて、お前が薪を割れ。」(真栄里方言)

² 名嘉真 (1989) では意志を表す接辞として *-aa* が挙げられているが、話者によると、これを用いると勧誘としか解釈されないという。

真栄里方言の場合は意志を表す場合に、主語の対比焦点で焦点標識が出現する。

- (8) a. *taraa=ja ar-an-kunee baa=du tamunoo bar-aa.*
 太郎=TOP ある-NEG-? 1.SG=FOC 薪.ACC 割る-VOL
 「太郎じゃなくて、私が薪を割ろう。」(真栄里方言)
- b. *gusjee ar-an-kunee cjaa=ju num-aa.*
 お酒.TOP ある-NEG-? お茶=ACC 飲む-VOL
 「お酒じゃなくて、お茶を飲もう。」(真栄里方言)

竹富島方言も同じく B パターンに属するが、意志を表す場合でも接辞によって焦点標識の出現可否が異なる³。焦点標識は動詞が非過去の接辞を取る場合には出現可能であるが、意志の接辞を取ると出現不可になる。現時点ではこうした形式による差異について精査できていない。

- (9) a. *fiki=ja suunu. pingi *=du haradi.*
 殴り=TOP する.NEG 逃げ=FOC 行く.VOL
 「殴りはしない。逃げて行こう。」(竹富島方言)
- b. *fiki=ja suunu. pingi=du haru.*
 殴り=TOP する.NEG 逃げ=FOC 行く.NPST
 「殴りはしない。逃げて行く。」(竹富島方言)

現時点までの調査で C パターンに属する方言は見つかっていないが、周辺方言や琉球諸語の他の言語を見ることで見つかる可能性がある。下地 (2010) は石垣島宮良方言で勧誘・意志と命令の場合に焦点標識が出現しにくいことを指摘しているため、八重山語の中ではこの方言が C パターンに属する可能性がある。

モダリティの階層は、八重山語だけではなく、琉球諸語の他の言語の方言差も説明できる可能性がある。例えば南琉球宮古語において、池間方言では通常意志形や命令形と焦点標識が共起しないとされていることから (林 2013)、これは C パターンに分類できる。伊良部島長浜方言は意志形が焦点標識と共起可能であるが (Shimoji 2011)、意志の場合には、調査者が確認をしない限り焦点標識が使われないことから、竹富島方言と同じ B'タイプに分類できそうである⁴。

6 今後の課題

本発表は、八重山語の 3 方言のデータを検討し、焦点標識の出現にはモダリティに従った一定の序列があることを指摘した。その結果、Shimoji (2018) の焦点階層に加え、(5) に示したモダリティの階層を追加することを提案した。この階層を導入することで、焦点標識とモダリティの関連を明示し、Shimoji (2018) で Non-restrictive pattern とされていた方言の間にも、制限の差異があ

³ 竹富島方言のデータは、中川奈津子氏の提供による。

⁴ 伊良部島長浜方言の言語事実は、下地理則先生からのご教授による。

ることが分かるようになる。

今後の課題は以下の3点である。

まず、Shimoji (2018) の焦点範囲の階層における **Argument** の細分化の問題を解決することである。3節で述べたとおり、焦点範囲の階層において **Argument** とされるものの中でも、少なくとも大浜方言では主語と目的語で焦点標示の受けやすさが異なっている。下地 (2017) に従い、主語 > 目的語 > 述語という階層にすることも可能であるが、この場合は Shimoji (2018) において示された北琉球奄美語徳之島町伊仙方言の言語事実が問題となる。

次に、モダリティの階層の精緻化が挙げられる。本発表では直説法、意志、命令の3つをとりあげたが、これは更に細分化される可能性が高い。例えば直説法の中でも、話者の確信を表す「確信形」は焦点標識と共起できないことが指摘されているため (Shimoji 2011)、直説法からさらに細分化する必要がある。さらに希求法には願望形もあるため、階層のどの位置に組み込むかも検討しなければならない。

最後に、モダリティと情報構造の関係に対する説明も課題となる。発表者は、モダリティの階層の存在基盤をまだ解明できていない。言語類型論では言語が普遍的に持つ傾向や階層を見出した場合、それが成り立つ理由を説明することが求められる。そのため、直説法が希求法よりも焦点標識を用いられやすいことに対しても、何らかの言語内的・外的な理由を説明しなければならない。モダリティと情報構造の関連から、モダリティの階層が成り立つ理由を探る。

略号一覧

-: 接辞境界/=: 接語境界/ 1: 1 人称/ 2: 2 人称/ ACC: 対格/ FOC: 焦点/ IMP: 命令/ NEG: 否定/ NOM: 主格/ NPST: 非過去 / SG: 単数/ TOP: 主題/ VOL: 意志

参考文献

林由華 (2013) 「南琉球宮古語池間方言の文法」博士論文, 京都大学.

かりまたしげひさ (2011) 「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』7(4): 69-82.

ローレンス, ウェイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁 (編) 『宮良當壯記念論集』547-559. 沖縄: ひるぎ社.

名嘉真三成 (1989) 「八重山大浜方言の動詞活用」『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』34: 1-11.

下地賀代子 (2010) 「石垣・宮良方言の係助辞-du の文法的意味役割」『日本語文法』10(2): 143-159.

Shimoji, Michinori (2011) Quasi-Kakarimusubi in Irabu. *Japanese/ Korean Linguistics* 18: 114-125.

下地理則 (2017) 「日琉諸語における焦点化と格標示 格と取り立ての体系的な研究を目指して」コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—助詞のすがた—」講演. 国立国語研究所, 2017年3月9日.

Shimoji, Michinori (2018) Information structure, focus, and focus-marking hierarchies in Ryukyuan languages. *Gengo Kenkyu* 154: 85-121.